

「私はすでに世に勝っている」

ヨハネによる福音書 16章25節～33節

説 教 軽 込 異 牧 師

讃美歌Ⅱ-185「主イエスの十字架がためなり」、また讃美歌21-303「丘の上に荒削りの十字架立つ」。礼拝の場の真ん中に床から天井までの十字架、荒削りの木の十字架が建てられ、その周りに私たちは集められている、そのような礼拝をイメージしています。私たちはそのもとに立ち、主イエスのお苦しみをみつめています。主イエス・キリストの十字架のお苦しみを覚える受難節は、沈痛な思いだけでなく、キリストによって罪が赦された感謝と喜びの時です。今まで地面ばかり見ていたのが、寝てもさめても自分のことしか見ていなかったのが晴れ晴れと天を見上げて過ごす、それが受難節です。

主イエスは、当時の宗教指導者のねたみ、ローマ帝国の政治家のおもんばかり、何より私たちの罪のために十字架にかかれ、そして復活なさいました。故に、主イエスはまことの勝利者です。神に造られたものが神に対して罪を犯してしまった、人間はみな罪人である、と聖書は言います。しかし、私たちは自分自身の中にある醜い姿、罪を見つめることがこわいのです。ただ、私たちの罪のために十字架にかかれた主イエス・キリストを通して、キリストの光の中で、ようやく初めて自分は罪人であると認めることができます。

主イエスがたらいに水を入れ、タオルをとって私たちの足元にひざまずいて足を洗ってくださったら、ペトロのように「わたしの汚れた足など洗わないでください」と叫ばずにはおられません。しかし主イエスは、「わたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と言われます。主イエスに足を洗っていただかないでも大丈夫だという人間はいません。主イエスに足を洗っていただいて、私たちは愛の担い手として生きるのです。(ヨハネによる福音書13章)

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(33節)「あなたがた」は弟子たちであり、イエスを信じるが故に殉教を前にした人々、そして「今」の私たちです。信仰を貫こうにも妨害するものが強く、何があっても信じ続けるという自信はありません。ペトロが主イエスを知らないと言ったとき、「すると、鶏が鳴いた」という印象的なシーンがあります。勝利するどころかこの世では敗れに敗れている私たちです。

「世」というのはキリストを認めない世界であり、私たちです。「神はその独り子をお与えになったほどにこの世を愛された」、この「世」は、私たち人間です。ヨハネによる福音書1章では「闇」とあらわされます。「闇は光を理解しなかった」。私たちは大きな矛盾を抱えた存在、罪を中に抱え込んでいます。そこに神の光、愛が注がれて、主イエスは私たちを自分のものとして引き受け、愛の中におらせてくださいます。

主イエスが勝利者であるということは、たとえ私たちすべてがこの世で負けてしまっても、主イエスの勝利につながるができるということです。だからこそ、私たちは祈れます。信じられない、信じようとしなさい、私たちの不信仰よりも主イエスの方が強いのです。主イエスの十字架は確かなしるし、確かな約束です。だからこそ、今ここで礼拝を守り一生懸命言葉を蓄え、讃美歌を歌い、祈るのです。

E.ブルナーという戦後の日本の教会に大きな影響を与えたドイツの神学者の説教の1節、「私たちはいつ捕まってもいいように準備していますか。逮捕され、牢屋に入れられたら、どれだけ讃美歌を歌えますか。聖書のみ言葉を暗唱できますか。その備えがありますか」。第二次世界大戦真っ最中、ナチスにより信仰者が次々逮捕されているときの説教です。使徒言行録16章のフィリピの牢獄の情景を思い起こします。

今の私たちに迫害はないでしょう。しかし、歳をとり一人施設で暮らす時、一人病室で礼拝する時が出てきます。その時どれだけみ言葉を暗唱し、讃美歌を歌えるか。認知症になって祈る言葉も出て来ないかもしれません。老いを前にする私たちには切実な問題です。その時に、信仰の仲間が今日と同じように礼拝していることが慰めとなり、助けとなります。ペトロが牢に入れられていた時、「教会では、彼のために熱心な祈りが神にささげられた」。(使徒言行録12章5節)

今この時も、病床にいる友がいます。信じて何にもならないとつぶやき教会に来ない友もいます。その友の代わりに私たちが今、ここで礼拝するのです。それが勝利者キリストを信じて生きることです。

(記 説教要約奉仕者)